

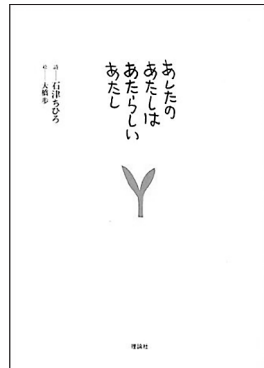
のは大きな体験だったかなあ、と思います。その後の、仕事では、翻訳と言葉遊びをやっていたのですが、あるとき何かのイベントで「石津さんのなぞなぞって詩みたいですね」と言われて、半ば本気で、半ば冗談で「私は、詩を書かない詩人なんです」と答えたらすごく受けて（笑）。そうしたらその会場にいた編集者さんから、「詩集を出しませんか」と熱心に誘っていたら、それで『あしたのあたしはあたらしいあたし』（理論社、二〇〇二）が誕生しました。それが詩を「書き」始めたきっかけです。

松村 私は子どもの頃から「少年少女文学全集」などの中の詩、とくにポードレールがすごく好きで、高校のときは文芸部で詩のまねごとを作ったりしていたんです。でも大人になって新聞記者の仕事も忙しくなって、そのうち詩は形式がないので、自分の中から呪詛のようにずると言葉が出てくるのが怖くなって……。短歌は定型だから、なんかオーデコロンのような感じに言葉を入れるみたいな感じが好きで、新聞歌壇に投稿したりしてました。出産・育児で休職した頃、短歌を本格的にやりたいと思って、馬場

あき子先生の短歌結社「かりん」に入りました。

——松村さんは、エッセイ集『少年少女のための文学全集があったころ』（人文書院、二〇一六）の中で、子どもの頃の豊かな読書体験について書かれています。石津さんにも、子どもの頃の読書について、お聞きしたいんですが。

石津 松村さんの『少年少女：』を拝読しまして、すごいなあ。私は「世界文学全集」の中から気に入ったものだけ読んで、今見返すと目次に○がつけてあったり。「あしながおじさん」とか、「公園のメアリー・ポピンズ」とか気に入ったものを読んで、たまに感想文を書く時なんかは「ラーマーヤナ」のような異国情緒豊かなものを選んで。そういうえば松村さんのところも、お父さまが言



葉に敏感な方ですよ。うちの父も言葉が大好きで、私のための子守歌を作ってくれたりして、さらに、父は建設会社をやっていたんですが空いてる土地で映画館を始めました。で、私はどちらかというと読書より映画ということになって、黒澤監督の「生きる」とか「白痴」を観て、原節子の毅然とした美しさに感動したり、植木等の「無責任男」にクスクス笑ったり……。やっぱり父親の影響は大きいなと思います。

松村 いちばんはじめに与えられた絵本は、石井桃子さんが訳した『ゆかいなかえる』です。私は一九六〇年生まれで、当時は、岩波・福音館の児童書の黄金時代でした。親はよく本を買ってくれましたが、読むもの読むもの石井桃子さんの訳で、文章はシンプルがいいという妙な信念とか、なんともいえないユーモアとか、影響うけました。あとは母親が先生をしていたときに、祖母に預けられたんですが、祖母は私のために、一曲一見聞きみたいな分厚い童謡の本を声がかれるまで、歌ってくれたそうです。野口雨情とか北原白秋とか。そうして入ってきた言葉の貯金で今やっている気がします。